

幼児の興味関心を大切にした教育実践 ～Aさんの育ちから学んだこと～

県立安房特別支援学校館山聾分校教諭 ^{すずき}鈴木 ^{まき}真紀



1 はじめに

本校の幼稚部では、「聴覚障害」または「言葉等の遅れが見られる」3歳から5歳の幼児が在籍し、保護者と一緒に活動している。幼児一人一人の可能性を最大限に引き出せるよう、幼児理解を深め、興味関心を手掛かりにしながら遊びの設定や支援の工夫をしている。Aさんの育ちを例にあげ、幼稚部での実践を紹介していきたい。

2 幼稚部での実践

(1)「好きなこと」を見つけよう

年少組でのAさんは、体を動かすことが大好きで、止まることなく校長室や保健室など様々な部屋に行くことが日課だった。他の遊びにも興味を示してほしいと思い、遊びの設定や支援の工夫について日々考えていた。帰りの会に行った読み聞かせの場面で一瞬見せた視線の動きが、絵本への興味の芽生えではないかと捉えた。教室に様々な絵本を用意し、繰り返し読み聞かせを行う中で、Aさんの好きな絵本は歌いながらページをめくる絵本や、同じようなフレーズが繰り返し出てくる絵本であることが分かってきた。徐々に読んでほしい絵本があると、教師に身振りサインで伝える姿が見られるようになり、一緒に絵本を読むことを楽しむようになった。

(2)「好きなこと」で存分に遊ぼう

年中組になると、畑での泥遊びが好きになり、教師と一緒に泥だらけになりながら存分に遊んだ。教師と一緒に遊ぶ中で、遊びの様子や気持ちなどを言語化して繰り返し伝える

ようにした。ある日、泥遊びを終え「次は、膝だよ。」と教師が膝に付いていた泥を洗い流すと、Aさんは教師の発音をまねて「ひざ」と言った。他にも、泥遊びを繰り返す中で、見たことやしたいこと等を言葉で表現することが増えていった。

(3)「好きなこと」から広がったやりとり

年長組になると幼稚部で飼っている生き物に興味を示す姿が見られるようになった。そこで、生き物と触れ合う遊びを設定したところ、ザリガニ釣りが好きになり何度も挑戦した。初めは、釣り竿を上げるとザリガニが逃げるが多かった。友達や教師と一緒に試行錯誤を繰り返すうちにコツをつかみ、ザリガニを釣り上げることができるようになった。初めて釣れたとき、満面の笑みで「見て、見て、釣れたよ。」と言い、うれしかった気持ちを言葉で表現することができた。この遊びを通して、感じたことや考えたことを、教師や友達に伝える場面も増え、友達同士でのやりとりへと広がる様子が見られた。

3 おわりに

Aさんの成長する姿を見て幼児が存分に遊ぶ中で、様々な気持ちを味わったり、学んだりすることの大切さを改めて感じた。幼児の育ちは、大人からの一方的な関わりではなく、人や物等すべての環境と幼児が自発的に関わる中で促進されていくものである。今後も、幼児が心を動かされるような教育環境を整え、幼児の姿や変容を丁寧に読み取ることができるよう研鑽していきたい。